

政策創造学ニューズレター

(愛称：テルマエ通信)

創刊合併号に引き続き、第2弾となる3号をお届けいたします。今回の主な内容は、政策創造研究科の創設2年を経た今春、初めて当大学院から修士の学位を授与された方々の「第1期修了生の論文特集」です。

修了生の方々と私は、1年間の付き合いでしたが、授業や研究活動を通じ、時に競い、時に励まし支え合いながら苦楽を共にしてきました。おかげで、私も密度の濃い1年を過ごすことができました。今号のニューズレター作成に際して修了生に行ったインタビューや、学位授与式後のパーティーでは、修了生から貴重なお話がたくさん聞け、とてもよい刺激を受けました。その中でも、今回は優秀論文賞を獲得されたお二方の逸話を披露させていただきます。研究をまとめる上での苦労など、研究と向き合う姿勢は大いに参考になるでしょう。

「修了生の論文特集」に加え、後段では、政策創造研究科における研究プロジェクト活動の紹介や学内の情報も詰め込んでおります。さあ、どうぞご覧下さい。

(井嶋充憲)

修了生の論文特集

第一期修了生が学位を授与

3月24日(水)午後2時から大学内教室にて、政策創造研究科の初めての学位授与式が行われました。栄えある第一期修了生として修士となられたのは12名の方々です。研究科長の岡本教授による開式のご挨拶のあと、修了生ひとりひとりに学位記が手渡されました。

続いて優秀論文の表彰が行われ、雇用政策プログラムの鍵谷道生氏と公共政策プログラムの堀内匠氏の2名が受賞されました。さらに優秀論文に準ずるものとして2名が選出され、優秀論文とともに「政策創造研究科優秀論文集」(4月末出版予定)に掲載されることになりました。論文審査については、全論文を精査された尾羽沢准教授から各論文の受賞理由の説明と今後の期待が伝えられました。その後は受賞者の感想がコメントされ、最後に女性修了者それぞれに向けて正指導教員から小さな花束が手渡され、和やかなムードの中で授与式は終了いたしました。

学位授与式後は、大学内の別教室に会場を移し、都市文化創造プログラムの増淵教授の司会で修了パーティーが催されました。ビール片手に教職員の方々と修了生が歓談するシーンは、比較的規模が小さいがゆえにアットホームな我が大学院のいつもの姿でした。



政策創造研究科の第1期修了生の方々

今後、さらに研究を進める方々、研究成果を社会で実践される方々、新社会人として就職される方々、道はそれぞれの方向ですが、いつかまた新たな問題意識と向上心を胸に再会できることがありますように。第一期修了生の皆様、おめでとうございました。

(鈴木美伸)

優秀論文賞受賞者インタビュー
鍵谷道生(雇用政策プログラム)

「エンプロイアビリティ」と人的つながり」(正指導教員―諏訪康雄教授)

鍵谷さんは金融機関をリタイアされた後のセカンド・キャリアとして大学院に進学されました。我が諏訪研究室の中でも最も向学心に溢れた方であると同時に、いつも余裕のあるジョークで張り詰めるゼミの雰



優秀論文賞を受賞した鍵谷道生氏

困気を和ませてくれていきます。その鍵谷さんに、今回の優秀論文賞の受賞についておうかがいしました。

「このテーマを研究しようと思ったのは、自分の身の回りには元気で生き生きと働いている高齢者が多いと思われる一方で、素晴らしい能力を持ちながらも働きたいのに働けない、または働かない人が多い実態はなぜなのか、という問題意識からです。結論をいうと、この研究での私の発見は、定年以降の転職能力（エンプロイアビリティ）を向上させるのは、労働価値の再認識と働くことの自立性、そして最後に仕事につながるコネ（良い人間関係）が必要であるということでした。」落ち着いた論調ながら、熱いものを秘めた話し方で鍵谷さんは論文作成の苦労話についても語ってくれま

した。

「入学当初は論文の書き方について全くわからない状態でした。講義で論文に必要な基礎情報を得ながら、正指導教員である諏訪先生とのゼミ活動・個別指導を通じて、だんだんと論文作成のコツが掴めてきました。それはまず、論文の構成づくり（ゼミでは「お作法」と呼ぶ）をしつかりすることです。自分が「何」を発見したのか、それをどう検証するのか、研究計画で決めたテーマを改めて明確にする必要があります。そして、テーマはできるだけシンプルに絞り込むことです。最初はあれもこれも入れたいと思うものなのですが、論点が広がり過ぎると焦点がぼけてきます。

中盤で苦労したのは分析手法（統計的処理）の習得で、PCの扱いには泣かされました。また、最初にしっかりとやっておくべきだったのは先行論文の調査です。これを忘れると自分の論文の新規性や位置づけがわかりませんからね。特に身近な先輩の良い論文は本当に参考になりますから、絶対に先に読むべきです。

いま研究を振り返ると100%消化はできなかつたな、という印象です。ただ、これは先にも述べたとおり、与えられた時間と能力ではあれもこれもやるのではなく、ココをやるんだ、という見切りも必要だという気持ちもあります。最後には重要だと思えるのは、指導教員の先生には内容や方向性について早く具体的な相談をすること

です。先生方は超多忙ですが、遠慮すると自分が泣くことになります。授業料も高いですし、積極的に先生に相談した方が良いですよ。」

今後はこの研究成果を是非、社会で活かしていきたいと語る鍵谷さんですが、「もっと早く大学院に来ていれば、授業料も早く長く償却できたんですけどね。（笑）」と最後に笑いながら締められました。

審査委員長・尾羽沢准教授のコメント
自身の職業生活から気づいた問題意識をユニークなりサーチ手法を使いながらうまく論証している。新聞の「私の履歴書」分析、インターネット調査、インタビュー調査と、仮説を検証するためのリサーチの組み立てもうまく工夫されている。課題の発見、政策提言とも説得力があり、修士論文としては極めて完成度が高い作品である。
（インタビュー・鈴木美伸）

堀内匠（公共政策過程プログラム）
「自治体選挙における政治家間動員と亥年現象を素材に」（正指導教員―武藤博己教授）

仕事をされながら2年間で修士論文を書き上げ、見事、優秀論文賞に輝いた堀内さん。インタビューを通じ、論文を書くコツや仕事との両立を可能にしたポイントを探ってきました。なお、亥年現象とは、参議院選挙と統一地方選挙が同時に行われる年において、参議院選挙の投票率が下がる現



優秀論文賞を受賞した堀内匠氏

象です。
亥年現象を取り上げた背景は、選挙という民主主義のシステムがもつ排他性、つまり選挙参加が選挙参加を疎外し、もしくは判断を妨害する側面を解き明かそうとしたことでした。具体的には、各政治家は自分以外の政治家の選挙に何らかの支援を行っている現象があり、こうした支援関係によって影響を受ける個別の選挙の投票率に注目し、亥年現象と呼ばれる現象に関して実証研究（時間距離と投票率による計量分析）を行いました。

苦労された点

仕事との兼ね合いの中で、時間を見つけて研究を行うことや分析の手法が計量分析であったため膨大なデータを扱うことの難しさ・大変さがあったということです。また、計量分析では説明変数の取り扱い方にも注意を払ったということです。

苦労をどのように乗り越えたか
大切なポイントについて、3つお答えして頂きました。

1つ目は、計画性です。時間のない中で

の研究となるので、予めいかに計画立て進めて行くかが論文を仕上げる上で重要になってきます。

2つ目は、日々の努力です。大学院では誰かに教えてもらうというより、自分から進んで勉強をすることが大切であり、色んな本を手に取り勉強する積極性みたいなものが必要であるということ。

3つ目は、他の院生とのコミュニケーションです。院生同士は互いに切磋琢磨する関係であり、少なからず影響を受けたという事です。そして、院生含め先生方など多くの人とのつながりは、大学院で得られる最大の財産になったということでした。皆さんも、大学の施設だけでなく同じ院生や先生を捕まえ人的ネットワークを広げながら、優秀論文を目指してみたいかがでしょうか。なお、優秀論文賞を受賞されましたら、ニューズレター編集委員会が直ちにインタビューに参りたいと考えております。

大学院での授業

「指導教員の授業がとても魅力的でした。それから、研究や授業のみならず授業後にある飲み会の場での先生を交えての気兼ねない話し合いも授業のように刺激的でした。」とおっしゃっていました。学外でも、積極的に議論を交わし、コミュニケーションを図る姿は見習うべき姿だと思いました。

最後に

堀内さん、優秀論文賞の受賞、おめでと

うございます。また、快くインタビューを引き受けて頂きありがとうございました。

私も、インタビューさせて頂いたことを参考に研究活動に励みたいと思います。

審査委員長・尾羽沢准教授のコメント

今回の修士論文中、論文の技術レベル、まとめ方のうまさなどにおいて群を抜いている作品である。着眼点、分析手法、仮説の設定と検証、いずれも非の打ちどころがない。ほとんどプロの領域といえる。しかし、修士論文のテーマ設定としてはややテクニカルな事象を選んだという印象を受ける。その点だけが残念ではあるが、これは筆者の今後の研究テーマ設定いかに十分克服可能と考える。

(インタビュー・井嶋充憲)

2009年度修了生論文リスト

修士論文(五十音順)

鍵谷道生(雇用政策プログラム)

「エンプロイアビリティと人的つながりーどんな高齢者が就業を続けているか」(優秀論文賞)

佐藤公男(都市文化創造プログラム)

「東京・多摩地域における文化政策ー西東京市を中心に」

芹澤正恵(産業クラスタープログラム)

「『目のあるまち』に関する研究ー犬の散歩と高齢者の見守り」(優秀論文集掲載)

田中崇史(公共政策過程プログラム)

「地域主権下の地方議会における市民参加

についてー市民参加がもたらす地方議会改革への可能性」

三橋康司(ソーシャル・アントプレナー政策プログラム)

「開業率を高めるための一考察」

宮川正文(公共政策過程プログラム)

「子どもの視点に立ったインターネット相談の研究ーぱれっと電子掲示板による子ども相談実践の分析を中心に」

堀内匠(公共政策過程プログラム)

「亥年現象の研究」(優秀論文賞)

匿名希望(都市政策プログラム)

「人口減少下における地方中核都市の今後のあり方ー北海道旭川市を事例として」

匿名希望(雇用政策プログラム)

「新しい形の契約社員像」(優秀論文集掲載)

政策研究論文(五十音順)

家村まな(産業クラスター政策プログラム)

「高齢者の生きがいー美容を取り入れた高齢者の新しい生き方への提案」

佐々木広美(雇用政策プログラム)

「職場におけるコミュニケーション能力と問題解決能力ービジネスマナーをめぐる諸問題の研究」

平松きよ子(ソーシャル・アントプレナー政策プログラム)

「高齢社会における菓子業界の経営戦略に関する研究」

プロジェクト紹介

サステイナビリティ研究教育機構における政策創造研究科の各種研究プロジェクト

法政大学サステイナビリティ研究教育機構(以下、サス研)は、2009年8月、大学院レベルの研究・教育の高度化に取り組む新しい全学組織として発足した。

サス研は、環境サステイナビリティをコアのテーマとしながら、経済システムや福祉システムのサステイナビリティをも対象として、広義のサステイナビリティ研究を課題としている。5つの研究プロジェクトと3つの事業プロジェクトが設定され、そこに大学院11研究科の教員・院生からなる20の研究チームが、研究プロジェクトにもとづいた研究テーマを設定し、研究教育活動をおこなってきた。

政策創造研究科からも3チームが加わり、精力的な活動が行われた。3チームの研究テーマとメンバーは、以下のとおりである。

「地域サステイナビリティに不可欠な基盤となる地域産業・雇用政策と地域産業・雇用コーディネータの育成」

代表ー諏訪康雄、共同研究者ー小峰隆夫・坂本光司・黒川和美・戸刈利和、大学院生ー白蓋由喜・鈴木美伸・福田稔

「景観保全問題の市民自治に基づく解決過

程」

代表―武藤博己、大学院生―山岸達矢・宮川正文・堀内匠

「サステイナブルな地方中小都市の環境形成システム論―地域づくりアドミニストレーター育成」

代表―恩田重直、共同研究者―増淵敏之・岡田恵子・黒田英一・羽羽沢信一、大学院生―田川伸一・佐藤充

諏訪チームでは、「地域が自立的に維持されるには地域における産業・雇用の展開が不可欠であり、産業・雇用・教育（人材育成）の三者が相互に連携しながらバランスよく展開していくことが必要である」とし、欧州においてサステイナビリティが優れた地域は、これらの間の連携システムが一定水準に達していることが特徴的であるが、日本では、「地域産業政策」「地域雇用政策」に関する議論が進んでいない中で、喫緊の課題である産業・雇用・人材育成の3分野の連携をコーディネートする人材育成の取り組みについての調査研究が行われた。

武藤チームでは、「景観法の成立に象徴されるように、身近な空間を連続性のある都市景観として捉える意識が高まっているが、都市景観紛争は依然として頻発している」状況を鑑み、地域の合意にもとづく空間制御を実施的に可能とする制度と市民の取り組みと、景観紛争の社会的過程に着目

し、市町村が制定する景観条例とまちづくり条例を活用した空間制御過程について調査研究が行われた。

恩田チームでは、「わが国において画一化が進んだ地方中小都市について、様々な分野から「地域資源」をとらえ直すことで、差別化をはかり、その都市や地域固有の持続可能な環境形成のあり方を探ることを目的とし」、様々な分野の知識を必要とする地域づくりにおいて、新たな地方中小都市論を構築できる研究者の育成と各分野での調査方法や研究の体系化をめざし、調査研究が行われた。

これらの研究成果は、3月6日にサス研全体の20チームが一堂に会する報告会が催され、各チームの大学院生がその成果を報告した。

今回のサス研における調査研究は、文理融合で様々な分野の研究者が「持続可能性のある社会」に対してのそれぞれのアプローチを展開し、互いに研究成果を共有できたことに大きな意義があった。政策創造研究科においても、各分野の先生方と院生の共同プロジェクトによる精力的な共同研究ができ、それぞれのフィールドにおける研究活動を知るとともに、相互に理解を深めあうことができたことは大きな成果であったといえる。

(田川伸一)

新着情報

シンポジウム・研究会等

4月7日(水)

第13回 法政大学イノベーション・

マネジメント研究センター講演会

「ハイテク・スタートアップの国際比較」

時間―18時00分～20時15分(講演会)

20時20分～21時00分(懇親会)

場所―法政大学市ヶ谷キャンパス

ボアソナード・タワー26階

主催―法政大学イノベーション・

マネジメント研究センター

講演会・懇親会参加費無料

4月10日(土)・11日(日)

東京芸術大学・ポロニーヤ大学

共同シンポジウム

「日本とイタリアの歴史的都市―その保存と変容」

時間―両日とも10時00分～17時30分

場所―東京芸術大学美術学部

中央棟第一講義室

主催―東京芸術大学美術学部

ポロニーヤ大学高等学術研究所

入場料無料

学内イベント

4月3日 入学式(入学式後、新入生+M2

対象のオリエンテーション)

4月3・6日 健康診断

4月8日 授業開始

編集後記

3月22日、法政大学のちようど真裏に位置する靖国神社の桜の花の開花宣言がされました。私が政策創造研究科の第二期生として入学してから1年が経とうとしています。新入生に向けたガイダンス後の懇親会の際に、ボアソナードタワーから満開の靖国神社の桜を見降ろしたことが懐かしく感じられます。学位記授与式も終わり、新学期も近づきますね。今年の新入生も同じ光景を目にするのでしょうか。次号は、そんな新学期らしい内容満載です。お楽しみに。

(堀江慶子)

謝辞 本ニューズレターは、法政大学サステイナビリティ研究教育機構による教育研究高度化のための支援事業の成果の一部です。ここに記して謝意を表します。

政策創造学ニューズレター第3号

編集・発行

法政大学大学院政策創造研究科内

政策創造学ニューズレター編集委員会

(浅田眞澄美、井嶋充憲、鈴木美伸、

那須田摩美、堀江慶子、横井友美加)

発行日―2010年3月31日